

はじめに

我々鍼灸師が鍼灸治療で何が出来るのか。術者の手を媒体として宇宙の偉大なエネルギー（サムシング グレート）を鍼を使い灸を施し見えない気（衛気営気）に作用させ、見える気（血津液）に働きかけ、病体を健康体へと導くのである。

ここで「見えない気」「見える気」と表現したが鍼灸治療が再現性のない非科学的な医学だといわれるのも、この「見えない気」の世界で語られているからにほかならない。

では、生命は本当に物質だけで出来ているのかといえば、ここにいる人は全員ノーと答えであろう。

その見えない気を体表観察を通して見えるようにしようというのが今回の話の主体である。そのためには「水」の概念を抜きにしては話が出来ない。

そこで朝日新聞の記事から一部抜粋する。

《たかが水されど水！》

21世紀のはじめは生命の源である水のお話から。

身近にある空気と同様、普段何気なく飲んでいる水だが、人間はもとより地球上の生き物は水が無くては生きていけない。また、食との関連性が深いので水への理解を深め関心をもつ事が必要だ。

地球上に存在する水は、約四億立方キロメートルとされるが、内96.5%は海水で更に塩分を含む地下水を除くと淡水は25%にとどまる。しかもその淡水のかなりの部分は南極や北極の氷山なので人々が利用できる河川、湖沼、地下水はわずか0.8%だ。

ところで、人体内に含まれる水の割合は意外と多い。一般成人で約60%、体重60キロの人なら36キロは水で占められる。また、生きていく為に必要な1日の水の量は一般に体重1キロあたり約0.04リットル。体重60キロの成人ならコップで1314杯分という事になる。

健康維持に欠かせない水の体内での働きを簡単にいえば、

- 1 老廃物の排泄を促し、新陳代謝を活発にする。
- 2 発汗を助けて体温を一定に保つ。
- 3 有害汚染物質等の希釈や戸材の役目。
- 4 覚醒と沈静の作用。

などが主だが、このほか血流をスムーズにして動脈効果を予防したり、肥満の予防や解消にも効果がある。また、体内に入った煙草の煙やダイオキシン食品添加物等の発ガン物質を排出する働きもあり、特に膀胱ガンの予防に有用という。

以上の新聞記事にも見られる様に、一般的にも「健康と水」との関係に関心が高まっている。

「天一水を生ずる」といわれるように、生命は水なしでは存在しない。

しかし、この水に関しての科学はほとんど進んでいないのが現状である。

本会では補瀉法の確立ということで、昨年の夏期研以来、衛気営気の補瀉法が取り上げられた。衛気営気つまり「見えない気」は変化生成の原動力であり、気が動けば水が動く、水が動けば血が動く。

言葉をかえれば血を動かす為に水にアプローチする、水を動かす為に気にアプローチする。

更に付け加えれば、悪血を取り除くことにより水が流れる、水が流れることにより気が動くということになる。

つまり、気血津液をあまり固定的に考えないで、その治療家の考え方や技量により、どこからでもアプローチできるのである。

ここまで話を進めるとおわかりいただけたと思うが、衛気営気の補瀉を施したことによって脈診による診断はもとより腹診・舌診・望診・等にその治療結果が反映されるのであ

る。

1 津液（水）について

先にも述べたように、難経は津液の病気はいわない。言わないわけではないが津液を直接処理する手技はない。これは、衛気營気を補うことで津液に働きかける事ができるからである。

津液は経脈外では気と親和性をもち、経脈内では血と親和性をもつ。したがってその病理変化は、経脈外では水毒となり、経脈内では血行障害を引き起こし悪血となり、それぞれ寒病症を呈するのである。

以下、湿病、水気病、痰飲について順に説明する。

1 湿病

脾虚による筋肉や関節の衰退が主な病症である。

これには、脾虚陽明経実熱証。脾虚陰虚証（胃の虚熱証）。脾虚陽虚証とがある。

胃は水穀の清微から常に陽気を生産している、陽気は活動的で、肺気の宣発作用により体表から発散している。

脾虚になると、胃の陽気が陽明経で止まり、太陽経で発散できないために衰退となる。そこに外邪の風・寒・湿が加わると寒熱病症をおこす。

外界に湿気が多くても脾虚がなければ発病しない（内傷なければ外邪入らず）。

靈枢の百病始生66に、「清湿虚をおそう時は下より起こるなり。」また、「湿は関節に流れる」とある。

これは、營気が虚して循環しないと関節に水が停滞することを示している。

2 脾虚陽明経実熱証

脾虚で胃の寒熱状態で、陽明経を中心とした部分（太陽経も一部入る）や筋肉関節に水が停滞した状態。

胃腸症状はなく、実腫・発赤・発熱を表す。

病症： 水に熱がからみ、筋肉や関節の浮腫・疼痛をおこす。

熱のために小便不利し、悪寒発熱や急性リウマチ・皮膚病などの病症を起こすこともある。

脉状： 沈・細・数・実

沈⇔湿。 細⇔気血の循環障害。 数・実⇔熱。 浮・数・実⇔陽明経の熱が多い。

治療： 脾を補い、胃経・小腸経の実熱をとる。

選穴は大都・労宮（火穴）

灸を不用意に施すと血熱となり痛みが悪化することがある。

3 脾虚陰虚証（胃の虚熱証）

脾には気血津液の全てがある。その中の津液が虚し、虚熱が発生したものをいう。

胃腸症状・痰飲及び筋肉関節の浮腫。

1. 脾虚陰虚の虚熱→腎の津液を乾かす→表（膀胱の熱）となる→小便不利→胃腸の水滞→痰飲病。

2. 脾虚陰虚の虚熱→表にむかう→発散できない→筋肉・関節の浮腫となる。

病症： 手足及び全身の倦怠感・腹満・腹痛・便秘・下痢・食欲減退。

脉状： 沈弦・もしくは浮大

沈⇔湿。 弦⇔発散できない熱。 浮・大⇔虚老。

治療： 太白、大陵（營気の補）

虚熱の程度により、陰陵泉に栄気の補。 胃経、膀胱経の瀉。

3. 脾虚陽虚証

脾は心包から相火を、腎からは津液をもらい胃腸を働かせている。

脾虚になるとその働きが低下して筋肉や関節に水が停滞する。

慢性化すると気血津液が製造されなくなり、命火（腎陽）不足となりさらに胃腸が冷えて脾虚腎虚陽虚証に移行する。

病症：胃の陽虚と水の停滞があるので、食欲不振・冷え・関節症状（慢性リウマチ）・小便難・手足の寒え・腹痛下痢・吐き気・悪寒・口中に唾液が多いなどがある。

脉状：沈・細・弱・虚・弦・遅などのいずれかの組み合わせ

治療：太白・大陵に衛気の補

弦脈（心火の水滞）があれば隠白の補

陽経、膀胱、小腸経も補う。

2. 水気病

腎虚肺虚より、脾内に水滞がおこるもの。

胃に入った水は、そこで消火吸収され、脾気の昇清作用により、上焦に運ばれる→肺気的作用により、一部は経脈内に入り全身をめぐる→一部は衛気的作用により発散される。

ところが、腎虚が慢性化すると虚熱はおさまる→さらに肺虚があるために気理の開こう不調をおこし浮腫となる→一部は下焦にいき、腎気のちからにより膀胱から排泄される。

ところが、腎虚になると、津液不足をおこし、その結果腎気（腎陽・命火）も不足して上下の陰陽（寒熱）の交流不調により小便不利となり浮腫をおこす。

病症：多汗・もしくは無汗。表の水滞により暑がりや寒がり。

夜間排尿・腰痛・脚弱など。

《金匱要略による分類》

金匱要略ではこの水気病を病症により風水、皮水、正水、石水、黄汗の5つに分類している。

風水⇔浮脈。関節痛、悪風などがある。発汗するとなおる。

皮水⇔浮脈。浮腫を指で押すと、陥凹してもとに戻りにくい。悪風はない。腹が鼓の皮のように張っている。口は乾かない。発汗するとなおる。

正水⇔沈・遅脈。胸がぜいぜいする。

石水⇔沈脈。腹は張るがぜいぜいはない。

黄汗⇔沈・遅脈。発熱。胸が張る。手足や顔面が腫れる。浮腫が長引くと膿を持った皮膚病になる。

水滞の脉は沈むのが普通だが、風水、皮水は浮脈だから発汗させてなおす。

正水、石水、黄汗は腎をおぎない離水させてなおす。

脉状：浮・大または沈虚。水が多いと弦のこともある。

治療：水気病は衛気を補うことで解決できるので、肺虚・腎虚・脾虚など、69 難型で治療する。

肺虚⇔経渠、尺沢を補い水を動かす。

腎虚⇔復溜・陰谷で外にある水を腎にもどす。（中年以後に肥満になったのは津液が血に変わらないためである）

脾虚⇔太白・商丘

脾は筋肉をつかさどる。したがって脾虚になると腎などりて筋肉の間に水が停滞する。

足腰の寒えの時に土穴・金穴を補い、膀胱経で陽気を補って症状が改善しないときは、腎経の陰谷を補うと症状の改善をみることがある。

水には水をもって行う（陰極まれば陽となる）の原理。

3. 痰飲病

脾の精気気虚で胃腸に水が多くなるもの。

脾虚陰虚、脾虚陽虚、脾虚腎虚がある。

もともと胃の弱いものが、熱病の誤治や飲食の不摂生などが原因で、この証になる。
胃の陽気の少ないものは、腎の陽気も少なく、痰飲ができやすい。
病症：動悸・息切れ⇔胃に水滯があり、陽気の運行を妨げるため。(腎虚)
食欲不振・吐き気⇔水滯が心下に貯まる為。
めまい・四肢厥冷・四肢のひきつり・浮腫⇔表の陽気が少ないため。
小便不利・下痢(小便と下痢は反比例する)
胃寒⇔胃内停水・吐き気・めまい・下痢など。
脉状：沈・遅⇔陽気衰、多水
細・しょく・弱⇔陽気衰になる。
治療：脾経⇔太白、陰陵泉。 心包経⇔大陵、内関。 腎経⇔太谿、太衝。 膀胱経⇔飛陽、崑陽の補法。
動悸が強ければ腎経の復溜、心包経の曲沢の補法(血脈をひきしめ余分な水をさばく)
めまいには丘墟、陽輔の補法。

4. 血分

血分は陰盛証に近いものであると考える。
これは悪血に水滯が絡んだ証であり、肺虚肝実として治療する。
中年以後の女性に多く、肥満して腹証に特徴がある。
血分⇔悪血に水滯が絡んだもの。水が血に変わらない。
水分⇔水滯に悪血が絡んだもの。営気の循環が悪く、水滯がおこる。
経水先にたち、後に水を病むを血分と名づく。なおしがたし。(脉経)
水気病、血分などの水は合水穴を使い、腎に津液をもどす。腎そのものの津液を補うというよりは、腎以外の水を腎に取り入れる作用がある。

陰盛証について考えてみる

陰盛証になる原因として、営気の虚、腎陽虚(水滯)、肝陽虚(血虚、血滯、悪血)の3通りがある。

脉状⇔沈・遅・しょく(洪)・実(細くて堅い)

しょく脈は血中の陽気不足であるから、肝病症を呈する。

冷えてくると身体の動きが緩慢になり、停滞充満し、悪血となる。

悪血は、冷え病症を主とした陰盛病症を表す病理産物である。

血虚による水の停滞が浮腫を発症し、触覚的にも冷たい。これが陰盛証である。

営気不足⇔津液を血に化成できない。⇔多水少血⇔冷え、浮腫、痛淵。

陽虚証⇔衛気を補う。(肺虚証)

陰実証⇔血熱病症⇔営気の瀉(肝実)

5. 足三焦経の運用

足三焦経は水病の診断および治療に欠かせない経絡であると考えられる。めまい・耳鳴り、神経の痛痺など、水の絡む病症はすべて足三焦経(委陽、飛陽、崑陽)に緊張、抵抗、圧痛、硬結の反応が現れる。

私の臨床経験では、三焦経の反応と証との関係は次の通りである。

肺虚⇔左委陽(軽按で緊張抵抗、按压すると硬結抵抗共に無いが圧痛有り)。

脾虚⇔左飛陽(軽按重按共に軽い緊張と抵抗)。

腎虚⇔右委陽(軽按で浮腫性緊張、重按で圧痛と硬結)。

肝虚⇔右飛陽(重按で圧痛硬結共に顕著)。

肝実⇔左右の飛陽、委陽(軽按重按共に左側は軽い反応、右側は圧痛抵抗硬結共に顕著)。

陽虚⇔左右の崑陽(軽按で浮腫性の抵抗、按压すると軽い圧痛)。

以上臨床の現場では、湿病、水気病、痰飲病、血分の四病形が複雑に絡み合い病症を引き起こしているため、その場に応じた証決定や選穴が重要である。

《参考・引用文献》

『臨床に生かす 古典の学び方』 池田政一著 医道の日本社

『臓腑経絡からみた薬方と鍼灸』 池田政一編著・監修 漢方陰陽会